２０２１年１０月１０日　説教「神のものは神に」　　高橋克樹牧師
聖書　申命記４章１～８節、マタイ福音書２２章１５～２２節

イエスが神殿の境内で人々に教えられているとき、ユダヤ教の指導者たちが来て、イエスの権威について、挑戦的な質問をしてきました。それに対してイエスは３つの譬えを語りましたが、それが済むと、今度は、第２の質問を投げかけてきました。それが２２章１５節以下で展開されている納税の是非に関する質問です。表面的には、税を納めるべきか否かという質問ですが、結局は時の国家権力に服従するか、シナイかという大きな問題の一部ですから、この質問にどのように答えるかで、時のローマ帝国にどのような立場を取っているかがわかるわけです。

１５節をみると、ファリサイ派の人たちが「どのようにしてイエスの言葉じりをとらえて、罠にかけようかと相談し」ていたことがわかります。そこで、ファリサイ派の弟子たちとヘロデ派の人々と一緒にイエスの所に来て尋ねたのが「皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか。適っていないでしょうか」という質問を投げかけたのでした。弟子たちをヘロデ派の人たちと一緒に遣わしたのは、ファリサイ派の人たちが既にイエスに顔を知られていたからでしょう。そこで、まだ顔の知られていない弟子を遣わして罠にかけようとしたのです。ですから、彼らはまずイエスに「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てなさらないからです」（１６節）とイエスを褒めてから罠にかけようとします。

当時のユダヤでは、皇帝への税金は大きな社会問題であり宗教的な問題でした。ユダヤ民族は神から選ばれた選民であるという意識を持っていました。ところがローマ帝国の支配下にあったため、宗教的なある程度の自治は認められている一方で、ローマ帝国に対して人頭税などの税金を納める必要があったのです。ファリサイ派はローマ皇帝への税金の死洗いに関しては反対の立場を取っていました。ですから、ローマ帝国のために働く徴税人を罪人扱いしていました。ヘロデ派の人たちは、ユダヤの名門であるハスモニヤ家の血筋であるヘロデ家を何とかして盛り上げるためにカイザルの心象を良くしようと考えて、税金を納めることを容認していました。

ですから、ファリサイ派の人たちは、自分たちの弟子を、納税に対しては賛成派のヘロデ派の人たち一緒にイエスのもとに遣わして、ローマ皇帝への納税問題で罠にかけようとしたのでした。もしイエスが納税に対して賛成の立場を取れば、ユダヤの民衆の一般的な反ローマ帝国の感情からみて、イエスはメシアとして尊敬されなくなりますし、反対の立場を取れば、ヘロデ派だけでなく、時の権力筋であるローマ総督やヘロデ領主から反逆罪に問われることは明らかです。どちらに転んでも、イエスは危険な立場に追い込まれることは明らかです。一般民衆はメシアが到来すれば、ローマ帝国に税金を納める屈辱から自分たちを解放してくれるものと期待していたのですから、民衆はイエスをそういう解放者

として期待を寄せていたのです。そのような期待はイエスから見れば間違いなのですが、そういう期待を寄せる民衆の心情は痛いほど理解していたと思います。

いずれにしてもイエスは彼らの悪意に気づいておられたのです（18節）。そこで皇帝に納める税金は律法に適っているかという質問に真正面から答えることはなさらず、デナリオン銀貨を持って来させると、「これはだれの肖像と銘か」と問うて、「皇帝のものです」と応えるのを待って、「では、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と解答したのです。税を納めるために用いられていた貨幣は、デナリオン銀貨です。ローマ兵の一日の給与が1デナリオンであったと言われています。しかし、ユダヤ人は皇帝の肖像が刻まれているデナリオン銀貨を納税に用いることは、愛国的なユダヤ人にとって最大の屈辱でした。過激派のゼーロータイなどは、この貨幣に触れることさえ罪とみなしていたのです。

質問者は「税金を納める」のが良いのか悪いのかと問うたのに対して、イエスは税金は納めるものではなく、返すものだと答えたのです。この問いはイエスを罠にかける巧妙な質問ですが、一方において、すべてのユダヤ人が必ずこの問いに何度も出会い、迷い、悩み苦しみ、それでもやむなく「あれか、これか」を選ばざるを得なかった重い問いであったのです。そのことを考えると、イエスの回答は民衆の答えのない問いに対する明確な答えでもあったのです。民衆は、屈辱的なローマ帝国の暴力支配のもとで呻吟するだけでなく、民族的な尊厳性も奪われていたのです。けれども、ローマ帝国の支配のもとでは、神殿への献金よりも、納税を優先しなくてはならない屈辱的な生活を送っていたのです。いくら自分で自分を懸命に説得しても、神に返すべき献金を後回しにせざるを得ない屈辱感は晴れることはなかったはずです。

それに対して、ファリサイ派や律法学者は、さまざまな規定を設けて、形式上は手を汚すことなく、行いも澄まして、自らを義となしていたのです。しかも、彼らは貧しいやもめの家を悔い倒し、二重、三重の重税にあえぐ民衆の上に、物の見えない案内人として君臨していたのです。

しかし、イエスにとってはそれら一切の権威は、神の国の前に過ぎ去るものでしかないのです。ローマ皇帝も神の国にとって代わられるものでしかないのです。ですからイエスは、ファリサイ派の納税に反対する立場も、ヘロデ派の納税を容認する立場も超えた「神のものは神に返しなさい」という言葉によって、ユダヤ教の当局者だけでなく、一般の民衆の苦悩も取り去ったのです。このように語ることができたのは、イエスにとって現実の世界も来たるべき神の支配によって相対化されるものでしかないからです。さらに、「皇帝のものは皇帝に返し、神のものは神に返しなさい」と言った言葉の深層を探ってみたい。「皇帝のもの」を、皇帝の肖像と記号で識別したように、「神のもの」は神の肖像のことですが、神の肖像というのは、神のかたちに似せられた人間のことです。皇帝にはデナリオン銀貨を返せばいいのですが、神には、神の似姿につくられた人間、すなわち、自分自身を返さなければなりません。自分という人格を生涯にわたって磨き上げ、そして、それを最期の時には返さなければならないのです。もちろん、私たちは未完のまま生涯を終えます。け

れども、イエス・キリストがどのような人物であっても、神に受け入れられる存在として執り成してくださるのですから、心配をすることなく人生の旅路を歩み続ければいいのです。

【祈り】主イエス・キリストの父なる神さま。私たちは、あなたからいただいた命を十分に用いているようには思えない、欠けの合う者です。しかし、御子イエス・キリストが神の国の到来を私たち一人ひとりに約束して下さり、この世の現実は神の支配のもとでは最終的なものではないことを教えて下さいました。私たち一人ひとりがあなたの導きと支えに信頼を寄せて、あなたの示す道を歩み通していくことができますように導いて下さい。主イエス・キリストの御名によって祈り願います。